



『無題』2005年  
陶土、釉薬  
400×177×174mm



『キリンの山』2005年  
陶土、釉薬  
565×401×420mm



『無題』1991年  
陶土 232×945×211mm



『無題』2001年  
陶土 232×287×313mm

『無題』1993年  
陶土 272×287×343mm



Mitsuteru Ishino  
石野 光輝  
1988年～ / 滋賀県在住

石野さんの制作は、即興的な感じや情動的な感じではなく、ゆっくりと見直し考えながらある一定のペースで着々と進んでいました。焼き上がった後も小さな破損を発見しては気にしていました。

「彼はいつもひたむきに努力し、好きなことに対しては高い集中力を発揮していました。一生懸命さがこちらにもひしひしと伝わってきました」と指導職員は話していました。

彼がいた児童施設では、初めは手遊びとし

て、手のひらサイズで自由造形を楽しんでいた子どもたちも、花瓶や傘立てのような大きな粘土成形のやり方を学ぶと、自然にその大きな形に自分の自由造形をくっつけていくような方法を考案することが多いようです。彼の一見不可思議な突起物の集合体も、よく見るとキリンが大きな粘土の塊に何匹もびっしりと張り付いているのです。何本もの角のような突起物の列はキリンの体の模様を表現しているそうです。そう理解してよく見ると、

彼の造形には様々な生き物らしきものが大量に張り付いていて、思わず笑ってしまいます。このような発想はまさに彼独自のものです。ユニークでユーモラスな生き物たちが円筒形の柱に巣食ってうごめいているようです。

彼の粘土制作は施設にいた3年間だけ行われていました。彼の作品はアール・ブリュット・コレクション(スイス)での「JAPON」展(2008～2009年)に出展され、その作品は同館に収蔵されています。(はた よしこ)



Chiyoko Taniguchi  
谷口 ちよ子  
1951年～ / 滋賀県在住

谷口さんは、粘土造形に関わり始めて30年以上にもなります。彼女は重い障害がありますが、粘土との出会いが彼女の感覚をとりこにし、粘土を最高の友達の人としてつき合ってきました。うまく言葉にできなくて、やり場のない思いを、柔軟な粘土に向かってたたきつけたり、丸めこんで閉じ込めたりしているようです。

彼女の心の中、喜びや怒りなどの様々な思いが、粘土を通じて形になっていくのです。

60歳を過ぎた今も、彼女は鋭い感覚、機敏な行動、周囲の雰囲気をつかみ取る敏感な感受性など、独自のセンサーを持っています。

彼女の粘土制作を見ていると、「粘土は、彼女にとって、かけがえない友達なのだ」と思えます。時には、粘土を頭などに塗って、その気持ち良い一体感を楽しみます。また、やり場のない思いから、粘土の大きなかたまりをバシバシと棒でたたきつけ、思いを吐き出すのです。(はた よしこ)

誰よりも敏感な彼女は、自然が育んだ粘土のもつ豊かな力を知っているのかもしれない。